

11. 腎癌の非癌部における steroid sulfatase の発現について  
—組織化学および in situ hybridization による検討—  
西川 恵・中沢俱子・相川英三 (解剖学・発生生物学)  
西村英樹・東間 紘 (腎臓総合医療センター)
12. Renal sarcoma  
白柳慶之・鬼塚史朗・伊藤文夫・前田佳子・  
大島 直・木原 健・中沢速和・東間 紘 (泌尿器科)
13. 腎糸球体内マクロファージ浸潤からみた小児期紫斑病性腎炎の検討  
木ノ上啓子・服部元史・松永 明・川口 洋・  
伊藤克己 (腎センター小児科)  
堀田 茂・中山英吾・川島真由子 (腎センター病理検査室)
14. IgA 腎症における糸球体内 PDGF 受容体発現とステロイド治療の関係  
内藤 隆・大図弘之・新田孝作・湯村和子・二瓶 宏 (第四内科)
- 座長 久保長生 (脳神経外科)
15. Dysembryoplastic neuroepithelial tumor (DNT) とその類似疾患について  
久保長生・嶋田幸恵・田鹿安彦・日山博文・高倉公朋 (脳神経外科)
16. 福山型先天性筋ジストロフィーの胎児剖検例：胎齢20週における大脳病変  
山本智子・小森隆司・柴田亮行・豊田智里・小林慎雄 (第一病理)  
近藤恵理・斉藤加代子・大澤真木子 (小児科)
17. 筋萎縮性側索硬化症の脊髓前角におけるシナプスの変化について  
佐々木彰一・谷田部可奈・近藤裕美・堀場 恵・  
岩田 誠 (神経内科)  
西川俊郎 (第二病理学)

閉会の辞

## 1. 胃壁下に懸垂した epitheloid leiomyoma (leiomyoblastoma) の1例

(第二病理) 石山 茂・池田郁雄・  
西川俊郎・笠島 武

症例は82歳の男性で、胆石・胆嚢炎のため手術目的で入院した。胆摘術中に胃体下部前壁大弯寄りに胃壁外性、有茎性に発育した腫瘤 (大きさ3.5×4.5×1.5 cm, 重量20g) を発見し切除術を施行した。組織学的には腫瘤には類円形ないし多角形の腫瘍細胞の充実性で上皮様配列を示す増殖がみられ、一部に紡錘型の腫瘍細胞も認められた。核分裂の頻度は低く (mitotic index 2-3)、低悪性度な epitheloid leiomyoblastoma と考えられた。免疫組織学的には vimentin, myoglobin が陽性で、 $\alpha$ -smooth muscle actin, desmin, S-100タンパクは陰性であった。これらの所見は通常の平滑筋腫と形態と性状が異なるもので細胞起源に論議が多い。平滑筋細胞の aberrant な分化にするとする Enzinger らの説を否定しえない。また、この腫瘍では臨床症状は潜在しかつ内視鏡的にも見出せないことが多いことがあり、また、再発することがある。

## 2. C型慢性肝炎における細胞接着分子の発現に関する免疫組織学的検討

(消化器内科) 谷合麻紀子・橋本悦子・  
青鹿圭子・石黒典子・林 直諒

〔目的〕細胞接着分子の C 型慢性肝炎肝組織内での発現について免疫組織学的手法を用いて検討した。

〔対象と方法〕IFN 治療を施行した C 型慢性肝炎で、治療前45例、治療後20例 (IFN 治療効果：著効9例、有効6例、無効5例) から針生検にて得られた肝組織を無固定凍結、薄切後アセトン固定し、intercellular adhesion molecule (ICAM)-1, lymphocyte-function associated antigen (LFA)-1, CD44 に対するマウスモノクローナル抗体を一次抗体として酵素抗体間接法にて免疫染色を行った。

〔結果〕IFN 治療前、ICAM-1は主に壊死・炎症部位の肝細胞膜上に、LFA-1は浸潤リンパ球に、CD44は浸潤リンパ球と Kupffer 細胞に発現を認めた。IFN 治療後、著効群ではこれらの発現は著明に減弱し、無効群では変化を認めない例が多かった。

## 3. 幼若巨核芽球の出現を主体とし MDS 様所見を

## 呈した高度血小板減少の1例

(第二病院内科II, <sup>1)</sup>第二病院病院病理科,  
<sup>2)</sup>慶応大学医学部病院病理科)

番場彩子・四条淑恵・川内喜代隆・  
藤野智子・安山雅子・詫摩武英・  
森 治樹・相羽元彦<sup>1)</sup>・榎本康弘<sup>2)</sup>

今回、我々は高度の血小板減少を呈し骨髓に Giemsa 染色上同定困難な幼若巨核芽球の増加と MDS 様所見を認めた1例を経験したので報告する。症例は、42歳の女性。口腔内出血を主訴に入院。Hb 7g/dl, WBC 6,600/ $\mu$ l, Plt 1,000/ $\mu$ l。骨髓穿刺検査上, NCC 77.3 $\times 10^4$ / $\mu$ l, Mgc 37.5/ $\mu$ l, 大型の核網織細な N/C 比の高い幼若細胞の増加を認めた。巨核球のほとんどは未熟で血小板産生を示さず、赤芽球にも異型性を認めた。methylprednisolone 大量投与にて末梢血、骨髓所見は著明に改善し血小板は正常化した。骨髓組織の電顕、免疫組織学的検索にて幼若細胞は巨核芽球であることが、同定された。幼若巨核芽球の増加は dysmegakaryopoiesis の存在を示しており、高度な血小板減少はその反映と考えられた。

### 4. 結核を合併した耳下腺ワルチン腫瘍の1例

(耳鼻咽喉科)

山崎たくみ・

吉原俊雄・石井哲夫

近年結核は社会環境の充実、生活水準の向上、化学療法の進歩に伴いその罹患率は激減し、予後も改善されてきた。耳鼻咽喉科領域における結核の発症は少ないものの日常診療において常に念頭におくべき疾患である。今回私達は耳下腺良性腫瘍の一つである耳下腺 adenolymphoma (ワルチン腫瘍) に結核を合併した1例を経験した。その組織像は二層性の好酸性の円柱上細胞と広汎な壊死像、周囲の肉芽形成を認め、一部にラングハンス巨細胞が認められた。また処理期に入っていたため、その数は極めて少ないが螢光法、並びに Ziel-Nelsen 染色法で長桿状の結核菌が認められた。ワルチン腫瘍に肉芽反応やラングハンス巨細胞を伴うものとしては、①結核によるもの、②サルコイドーシスによるもの、③シアログラフィーにおける造影剤に対する反応があげられる。今回経験したのは①によるものであり外科的切除と術後の抗結核剤の投与にて経過観察中である。

### 5. 両側顎下腺腫脹を示した疾患22例の組織学的検討

(耳鼻咽喉科) 吉原俊雄・山崎たくみ・  
水谷陽江・森田 恵・石井哲夫

最近5年間に両側顎下腺腫脹を示し来院した患者22例の検討を行った。疾患は慢性顎下腺炎 (Küttner 腫瘍) 4例、唾液腺症 (sialadenosis) 11例、線維索性唾液管炎 (sialodochitis fibrinosa) 2例、アミロイドーシス2例、悪性リンパ腫2例、唾石症1例である。Küttner 腫瘍は腺房の萎縮、消失、リンパ濾胞、小円形細胞浸潤を特徴とする炎症性疾患である。線維索性唾液管炎でワルトン管より排出された白色ゼリー塊は好酸球の集積が著明でアレルギーの関与が示唆される。唾液腺症の9例は女性で anorexia nervosa, 無月経を示し、腺房の腫大が特徴である。アミロイドーシスは血管周囲のアミロイドフィブリルが観察される。悪性リンパ腫の1例は T cell リンパ腫、他1例は ATL に伴う顎下腺腫脹を示した症例であった。

### 6. 口腔扁平上皮癌における p53, HSP70, Ki-67 の発現に関する免疫組織化学的検討

(歯科口腔外科, \*第一病理)

丸岡靖史・横尾恵美子・安藤智博・  
桑沢隆補・三宮慶邦・扇内秀樹・  
小林慎雄\*

今回65症例の口腔扁平上皮癌生検標本において抗 p53抗体、抗 HSP70抗体、抗 Ki-67抗体を用いて ABC 法にて免疫染色を施行し、その染色性と臨床病理学的諸因子、臨床所見との相関を検討し報告した。

①分化度別では低分化型ほど HSP70, Ki-67 の発現が高い傾向であった。②病期別では進行例ほど Ki-67 発現率が高い傾向であった。臨床経過との相関では、治療前より頸部リンパ節転移のみられた症例で、Ki-67 の発現率が高く、また遠隔転移のみられた症例では、HSP70, Ki-67 の発現率が高かった。③5年生存率は HSP70陽性群で HSP70陰性群に比べて低下傾向で、Ki-67高度発現群においても低下傾向であった。

結語：口腔扁平上皮癌においても p53, HSP70, Ki-67 は他臓器癌に認められる場合とほぼ同様な発現様式を示した。また HSP70, Ki-67 は口腔扁平上皮癌の予後推定因子として有用であることが示唆された。

### 7. 糖尿病と血管とのかわりー心筋内細小血管についてー

(第一病理)

金田良夫・

豊田智里・小林慎雄

最近、糖尿病剖検例において、冠状動脈の造影 (Factor 1980年, 横田 1985年) を行うことにより心筋内に毛細血管瘤を観察できたことから糖尿病と心筋内細小血管病変との相関性が指摘されている。しかしなが